

第17回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「猿の子」

東京都 香蘭女学校高等科一年 加藤 言美



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞

## 『猿の子』

東京都 香蘭女学校高等科一年 加藤 言美

「動物園から脱走した猿が学校の付近で田撃されたため、今日は集団下校となります。繰り返します——……」

騒がしい帰りの会の時間。途切れ途切れ聞こえる校内放送に、

きっとその猿が私のお父さんだ。

ただ、そう思つた。

「ただいまー」

重いドアを勢いよく引っぱって、開いた隙間にすするっと入り込む。後ろ手に力ギをしめて、手を使わずにクツを脱ぐ。同时進行でランドセルを玄関の隅に向かつて放り投げた。投げたランドセルが玄関の角っこにぴつたりはまつたら成功だ。コートやらマフラーやらも走りながらぬいで、最後は和室にしいてあつた布団にダイブ！

ドアから布団まで、早く行ければその日は良い日。私が決めたマイルールだ。ランドセルが少しズレた気がするけれど、あれはセーフだ。今日は良い日だ。

「春ちゃん、手は洗つたのー？」

やっぱり今日は悪い日だった。お母さんにアレを言われてしまつたりアウトなのだ。

「今洗おうとしてたのー！」

「あー、またそりゃじゅうに脱皮してつ。春ちゃんは蝶にでもなるつもりなのかしら？」

ハンガーを持つたままのお母さんがベランダから出て来て、のんびりと私の脱ぎ散らかしたものを持つていく。私はその横を走つて行つて、洗面所に





着いたら両手をわっと水でぬらしてびしゃびしゃの手のまま、わつ一度布団に戻つて一度田のダイブをした。

「うがいもしないとインフルエンザになつてせつかくの冬休みどいこも行けないわよー。」

「じつせどい」にも「行かないじゃん」

私はそう言ひながらかけ布団の山に顔を突つ込んだ。見なくとも、お母さんがしまつた、という顔をしているのが分かる。

お母さんはしそうく私のことを困つたように無言で見下ろしていたようだけれど、幼い弟の泣き声に、慌ててベビーベッドの方へ行つてしまつた。

昨日、またお父さんとケンカした。

いつものことだ。田に一回はして、一週間は口をきかない。

理由はいつもと同じ、お父さんが突然約束を破つたからだ。

スキーに行く約束をしていた昨日。朝の三時に起きて、バッグの中身を確認したり着がえたりしてからお父さんを起こしに行つた。何度も起きたから、お父さんの肩をゆすつたら、

「昨日は遅くまで仕事だつたんだつ。スキーになんて行けるわけないだろつ。こんな時間に起こすなつ」と、怒鳴られてしまつた。

結局お父さんは一度寝してスキーはなし。スキーに行こうつて言い出したのは自分のくせに。けど、一番くやしかつたのは、こうなるつて知つていたのに自分が期待してたことだ。お父さんは私より仕事が大事で、お父さんは約束を破るもの。それで、私の一番嫌いなものは約束を破る人。

私はお父さんが大嫌いだ。

「お前はあの公園で拾つたんだ。あそいは猿が住んでいるからお前は猿の子だ。お前はうちの子なんかじゃない」

お父さんは怒るといつもそう言つて、ベランダから見える小さな森のような公園を指さす。

そんなといつも大嫌いだ。

「春ちゃん……パンケーキでも、焼こうか」



顔を上げると、二つの間にか弟を抱いたお母さんがまた戻ってきた。立つていた。田が合つと、ね？ とお母さんは困つたように笑つ。お父さんは大嫌いだけど、優しこお母さんは大好きだ。

「うん……」

小さく返事してから布団に顔を押しつけ。やがてこのと、お母さんが頭をなでてくれた。

「お父さんはお仕事でえりへなつたばかりだから疲れてるの。じめんね……」

お母さんが謝るのと、じめんのと、お母さんを謝らせたかったんじやないのに。

「うん……」

これ以上お母さんで困つたような顔をしてほしくなくて、私は立ち上がつた。

お父さんは猿でも良こさう、お母さんは絶対、今のお母さんじやなあや嫌だ。

その日の夜、私はトイレに行きたくなつて田を覚ました。辺りを見回すけれど、いつも私はお母さんで寝てこるお父さんとお母さんはいない。ふすまを少しズラすと、居間のライトの光がまぶしきりこに差し込んだ。

田を細めてその間からのぞくと、お父さんとお母さんが向かい合つて座つていて、お父さんは、飯を食べていた。

何を喋つてゐるんだかわづ。

トイレに行く氣なんてすつかつ無くなつて、私はひつたつとうすまじ耳をくつつけた。

「ねえ、春ちゃんも冬休みだし、昨日もどりに」も連れて行つてあげられなかつたから、明後日にもどりに行きましょうよ

「あいつは冬休みでも、俺は違つ」

お箸が乱暴に置かれた音がした。

「お父さん……」

「誰が食費や塾代をかせいでこのと黙つてゐんだか。俺がしなかつたら誰が仕事するんだつ」



今度はイスをひく音がしてドシドシと歩こうと音がひびく。バンバンとドアが閉められた音が続いて、お母さんのため息と重なった。

聞かなきやよかつた。

ゆつべつと布団にもぐり込んで田を強くつむる。

くやしい。

悲しくなんてない。分かつてたことだ。

分かつてじたことなんだ。

そう思つても、涙と鼻水はあふれてきて止められない。

布団を噉かんで声をおぞく。

枕がグシャグシャになれた。

私なんて、拾わなきや良かつたじやないか。いらないなり、もう一度公園に捨ててくれれば良いじやないか。きっと、猿の方がお父さんより何万倍も優しい。

本当に、猿に生まれれば良かつたんだ !!

「こんこん」という音で、次に田が覚めた時、辺りはまだ真っ暗で、お母さんが隣に寝ていた。お父さんが寝てこなじことにほつとしていると、また、こんこん、とう音が窓の方から聞こえた。眠い田をくすって、真っ暗な窓を田をくじりして見てびっくりした。

茶色くてつかい猿が窓をたたいていたのだ。

私がびっくりして動けないでいると、開けて欲しい、とこりよつて猿が頭を下げたように見えた。どうやら礼儀正しい猿らしい。

私はおそるおそる力ギを外して、慎重に窓を開けた。

「ああ、やつと喋れそうな相手を見つけた」

オスの猿のようで、私の一倍はある猿は低い声でしゃべった。

「何を……？」

私が不審そうな田でさう聞くと、猿は慌てた様子でふんふんと両手を振つた。



「けつしてあやしいもんじゃないつー。私はただ、娘を探しているんだー。動物園に保護された時、森に置いて来てしまってね。やつと動物園から抜け出せたから探しているんだ。何か知らないかい? 娘の」と…

「わあ……?」

まだ不審そうにしている私を見て、猿のお父さんはしょんぼりと肩を落とした。

「そりゃー……あつがとう……」

そう言ってトボトボ歩いて行く大きな茶色のかたまりに思わず、「私も行くー。」

ベランダにとび出した。

「え、いいのかい?」

「どうせ起きちゃったんだもん。探すの、手伝つてあげる」  
すぐに帰つてくればお母さん達もきっと気がつかない。夜のうちに帰つてくれば良いんだ。

猿さんは本当にうれしそうに「うー」「うー」「うー」笑つて、顔中がしわくちゃになつた。

「そりゃー、じゃあ、行こうか」

「え、まつて、どうやつて?」

今更気がついたけれど、猿さんはマンションの壁。ベランダに階段なんて勿論ない。

「うつやつてだよ」

そう言つた次の瞬間、猿さんは田の前から消えた。

「え?」

慌てて手すりに駆け寄つて下をのぞくと、猿さんはマンションのパイプをするすると下りて行つて、ひょこひょこっと近くの電柱にとびのつたといつた。

「早くおこでー、もうすぐお母さんが沈んでしまうよ」

猿さんは「ゴー」「笑ひながら、おこでおこだと手招きしてくる。それを見ていると、なんだか私にも行ける気がして、柵から少し身をのばしてパイプをつかんだ。



一度パイプにしがみついた、上り棒みたいで意外とスルスル下りられた。そのまま猿さんみたいにひょこつと跳び、『信じられない』『驚くべき』と號べた。

「上手い上手い。お前さんも猿じゃないのかい？」

猿さんの隣の電柱にとぎのつた私を見て、猿さんは手をたたいて笑った。

「それじゃあ、行こうか」

笑い終わると猿さんは電線に両手でからりやがつて移動し始めた。電柱から

電柱へ。まるで木から木のようだ。

「私もできる。」

「できぬれ。わざきのまでもきたの?」

さつきみたいに、猿さんが簡単だと笑うから、私もできる気がして電線をつかんだ。

いつも歩いている道を今夜は上から見てる。『今してみないと電柱はどう?』でもあって、『どう?』でも行ける気がした。

「娘さんとはどう? 」でばぐれたの?」

「ちょうどあの森の辺りさ」

猿さんが指をした先にはあの、いつもお父さんが私を拾つたといつ公園があつた。

「行つてみよう。たしかこの道の先で曲がればあの公園まで電柱が沢山あるよ」

「ねねつやつがやつが。ありがと! よ」

猿さんが探している娘さんが、本当は私かもしれない、なんて『思えなかつた。』

公園に着いて、しづらしく私と猿さんは娘さんの名前を呼びながら移動した。娘さんの名前もハルで、ますます私みたいだつた。公園の一番端の木からその『反対側の端つこの木まで。高い木から、低い木まで。』

全部の木を見て回つたけれど、ハルちゃんはどうにもいなかつた。途中途中、休憩もした。私は猿さんからノミトリの方法を教わつた。猿さんの大きな背中から小さなノミをぽいぽい取ると、本当に猿みたいだとまた褒められた。



まだいるかもしれない、見てない場所があるかもしれない。もう一周。また休憩。もう一周、また休憩。

もうこの公園にはいないだろうとは言えなかつた。猿さんの顔色はどんどん悪くなつていゝけれど、猿さんは止めようなんて言わなかつた。

それを見ていて、思い出した。

私がまだ幼稚園生の時。家族でキャンプに行つた。お父さんとお母さんを驚かそうと思つて私は茂みに隠れた。そうしたが、すぐにお父さんの私の名前を呼ぶ声が聞こえて、必死に私を探すお父さんが茂みのすき間から見えた。見つかつた時はものすゞく怒られて、キャンプ中、私はずっと泣いていた。

あの時の、今にも倒れてしまいそうな顔とおんなじだ。今にも泣いてしまいうな顔とそっくりだ。

結局、私と猿さんは森を四周した。結局見つからなかつた。一番初めの田印の木に戻つて来た時、猿さんはしつちを振り返つた。

「もつ、君といつしょにいようかな……。まるで君が私の娘みたいだ。君も人間より猿っぽいし……」

「ダメだよ」

暗い顔でそう言つた猿さんの言葉をさえぎつた。

「ダメだよ。私は春だけど、ハルじゃないもん。電線のつかまり方だつて、ノミトリだつて、私より、きっとハルちゃんの方が上手いよ」  
だから、がんばつて。そう続けると、最初みたいに猿さんの顔がクシャツとなつた。

「そうだね、きっと、そうだろうな」

猿さんがそう言つたのと、私が木の枝から手をすべらせたのは同時だつた。

やつぱり、私は猿じゃなかつたみたいだ。

朝。いつも通り布団の上で、いつも通り田が覚めた。いつも通り三人で、飯を食べて、いつも通り登校する。いつも通り家に帰つて来て、いつも通りマイルールを実行した。

「あら、今日は服もハンガーにかけるし手も洗うのね」



## 賢治のまちから 高校生☆童話大賞

お母さんはびっくりした顔で私を見る。

う。全部カンペキに出来たら良い日なの」

「あら、いつのまにかお姉さんになっちゃって。」それでランセルも投げな  
くなれば大人なのに」

それは別

日、みんなでど、」が行、」うつて言つてたんだけどね……」

「和 漆石原 ておは がた」

「あら、随分気がきくのね。昨日の今日で、何があったの？」

「そう、昨日ね、猿さんには教えてもらひたの。電線(たこ)で移動もできるし、ノミアリだつて上手いんだからー。」

お母さんも笑っていた。

数週間後、動物園にあの脱走した猿たゞ供を連れて帰ってきて来たといふ。二  
ースは、私の人生で一番のビッグニュースだつた。